

四国霊場第七十八番札所

ごう しょう じ
郷 照 寺

0877-49-0710

- 【宗派】 時宗
- 【本尊】 阿弥陀如来
- 【開基】 行基菩薩
- 【創建】 平安時代
- 【歴史】

宇多津町を見渡す高台にあり「厄除けうたづ大師」として信仰を集めている郷照寺は、奈良時代神亀2年(725年)行基により開基され「道場寺」と称しました。弘仁6年(815年)にはこの地を弘法大師が訪れ、自作の尊像を刻み、厄除けの誓願をなされ、密教の霊地として栄えました。その後、時宗の開祖一遍上人が全国遊行のにおりに逗留され、浄土の教えを広め、多くの民衆の帰依を受けました。この時できた法縁にてこの寺は真言宗と時宗の両宗にわたる寺として四国札所唯一の霊場となりました。

室町時代には、守護大名(細川家)の庇護も得て大いに栄えましたが、元亀・天正の兵火により堂塔伽藍を焼失、寛文4年(1664年)に再興されました。その時の住持・浄阿上人と徳川家遠祖の関係により時宗に属し、本堂や客殿「観海楼(かんかいろう)」などが建築され、手厚く保護されました。今日現在「厄除けの寺」として、また、宗旨宗派を超えた寺として広く信仰を集めています。

【見どころ】

本堂 約400年前、江戸時代に再興されたものです。屋根の形は、奈良様式の造りで札所中でも珍しく、東大寺など奈良の寺院によく見られるものです。本尊の阿弥陀如来は、鎌倉時代の作で、県指定有形文化財となっています。平成11年10月の「平成の大修理」が終わり、美しく生まれ変わった姿を見ることができます。

太師堂 建物は大正時代に再建されたものです。お堂の中に入れるよう開放しているので、太師像を間近で参拝することができます。また参道脇には地下のお堂に三万体の観音像を納めた万体観音洞があります。

庚申堂 民間信仰の「庚申信仰」を伝えるお堂です。本尊は六本の手を持つ青面金剛。庚申信仰は、人間の体の中にある「三戸(さんし)」という霊物が庚申の夜、眠っている間に体から抜け出て天に昇り、天帝にその人の罪を告げるといいます。そのため庚申の夜は、人々が庚申堂に集まり、眠らずに語り明かすという風習がありました。

ホルトの木 樹齢4百年というホルト(モガシ)の巨木。文禄3年(1593年)本島の信者がルソン島(フィリピン国)から苗木を持ち帰ったものです。

その他 池泉回遊式の庭園、七福神、栗島明神、福德明神があり、常時参拝することができます。また、札所の中では唯一境内から瀬戸大橋が眺望することができます。

【主な年中行事】

正月会	1月	厄除け祈願の人々が全国より参拝し、大変賑います。
節分会	2月	参拝者には豆の配布があります。また太師堂内では祈祷があります。
彼岸会(春・秋)	3月 9月	彼岸の期間中、檀信徒の先祖供養を行います。
お盆施餓鬼会	8月	8月14日～16日の間。



庚申堂



ホルトの木